

研究実績報告書(中間・完了)

助成種別	一般	特別
	奨励	学術調査

(公財)岡山工学振興会

代表理事 小西 忠孝 殿

平成 28年 4月1日

代表理事 古賀隆治

(所属機関名) 川崎医科大学 耳鼻咽喉科学

(申請者名) 原田 保



研究題目	CDDP内耳障害における病態の解明	
研究期間	平成27年1月1日 ~ 平成27年12月31日	
共同研究者	氏名	所属機関(職名)
	與田茂利	川崎医科大学(講師)
研究題目についての研究発表	発表した学協会名と期日	発表した会誌等
	第25回日本耳科学会 (H27年10月7日~10日)	耳鼻咽喉科臨床
研究概要	<p>モルモットにシスプラチン(CDDP)を投与し、内耳に障害を発現させ感音難聴モデル動物を作製し、感音難聴の病態を明確にし、有効な治療法を確立するために研究をおこなってきた。これまでの研究で得た結果は①CDDP投与後、一酸化窒素合成酵素(NOS)が内耳に発現し、組織傷害を認めた。特に4~8KHzの聴覚閾値の増悪を認めた。②その傷害は2日目最大であった。③3日目以後は聴力閾値の増悪はなかった。この結果から障害発症から2日以内に治療をする必要があると考えた。現在感音難聴治療の第一選択はステロイド薬である。そこでモルモットにCDDP投与12時間後、2日目、3日目、4日目、5日目にステロイド薬を投与し、内耳組織を採取し形態を観察した。無投与群では外有毛細胞の高度な変性や消失が見られ、その傷害は蝸牛基底回転が最も著明であり、全回転に及んでいたが、内有毛細胞はほとんど傷害されていなかった。12時間後投与群では無投与群に比べ、外有毛細胞の変性は少なく、消失した個体はなかった。内有毛細胞は全回転で正常であった。2、3、4、5日目投与群は無投与群と外有毛細胞の変性、消失は同じであったが、内有毛細胞の変性は4、5日目群で著明な変性を認めた。以上より早期のステロイド薬の投与は内耳治療に有用と考えた。</p>	

1. 研究機関に応じ、報告書の中間・完了のいずれか該当のものを○で囲ってください。
2. 助成種別の該当事項を○で囲ってください。